

科目「子どもと言語表現」における演習と
幼稚園実習の関わりについて
——「児童文化財」に着目して——

On the Relationship Between Exercises and Kindergarten
Practice in the Subject “Children and Expression”:
Focusing on “Children’s Cultural Assets”

関根 久美

Kumi Sekine

はじめに

当該科目は、本学において幼稚園教諭免許取得者において「必修」となっている。その授業テーマは「乳幼児期における各発達段階のこどもに相応しい言語表現活動の展開と指導法を学習し、乳幼児期のこどもの言語表現活動を指導することができるような基本的知識と技法を身につけることを目標とする」とシラバスに明記され、その《学習成果》のひとつに「言語表現活動をするための基本的知識を身につけ実践することができる」がある。また、令和3年に文部科学省で作成された「教職課程コアカリキュラム・教育実習（3-2）保育内容の指導及び学級経営に関する事項 ※幼稚園教諭¹⁾」の到達目標において、「幼稚園教育要領及び幼児の実態等を踏まえた適切な指導案を作成し、保育を実践することができる」と明記されている。大学で身につけた「保育技法」を教育実習（幼稚園）で実践することは、「幼稚園教諭2種免許状を取得し教諭として幼児の教育に携わる者」として必須であり、それを通して幼児理解を深め、学生自身の自己課題を見出し、保育者としての一歩を踏み出すために乗り越えるべきステップであると考えられる。

当該科目ではその「言語表現活動」を「児童文化財」と捉え授業内で児童文化財についての学習に重きを置いている。児童文化財とは「子どもの成長を支える文化財。広義には、子どもに直接・間接に影響を与える全ての事象を指すが、狭義には、大人が子どものために用意する文化財を指す²⁾」と定義されている。絵本、紙芝居などが保育の現場では「児童文化財」として多くの場面で活用されている。

本研究では、授業内で解説、紹介、実践した「児童文化財」についての詳細と、その「児童文化

財」を学生が幼稚園実習において実践したか否かとその結果について検証、考察していく。その検証にあたっては「実習後アンケート」をとり、学生の実態を明らかにした。

アンケート調査について

対象

神奈川県Y専門学校 幼稚園実習 (2023年2月) 終了3年生 30名

調査時期

2023年7月

調査項目

- 1) あなたは、幼稚園実習中に「児童文化財」を子どもの前で実践しましたか。実践したもののすべてに○を付けて下さい。
①絵本 ②紙芝居 ③ペープサート ④パネルシアター ⑤エプロンシアター ⑥自己紹介絵本
⑦スケッチブックシアター ⑧その他
- 2) 自分が実践した実践について自己評価 (10点満点) と子どもの反応と幼稚園の先生からのコメントを記述して下さい。
- 3) 「児童文化財」はあなたの実習においてどのような「役割」をはたしましたか。また、あなた自身が保育者となった時、「児童文化財」をどのように活用し、そのようなことに留意していきたいと思いませんか。(自由記述)

児童文化財の詳細とアンケート結果

1、児童文化財の実践について

①絵本

絵本とは「絵 (視覚表現)」と「言葉 (言語表現)」が互いに自立し、しかも補い合って調和した「本 (書籍)」という形の児童文化財である。絵を伝達の主力手段とした本の事をいう。近年では絵本の形態は多種多様化し、一言で絵本とは何かを定義するのは難しい。すぐれた絵本は、絵と言葉が有機的に結びつき、頁をめくることによって時間と空間が移動し展開していく。物語絵本、知識絵本、文字なし絵本、言葉遊び絵本など保育の現場では「帰りの会」をはじめ様々な場面において子どもが「絵本の世界」を楽しんでいる。

◎アンケート結果

○実践者 30名中28名 ○自己評価平均点 8.6点

○コメント記述 (抜粋)

- ・集中して楽しそうに見てくれた。(多数)
- ・「見えない」という子どもがいた。

- ・質問や感想などの反応があった。
- ・絵本の「見せ方」についてアドバイスをいただいた。
- ・声の抑揚など「読み方」についてアドバイスをいただいた。
- ・褒めていただけた。(多数)

②紙芝居

連続した絵を順番に引き抜いて見せながら、演じ手が物語を語って演じる日本独自の文化財である。現在のような一枚の絵に登場人物や背景が描かれた紙芝居が登場したのは大正末期で自転車に舞台をつけて街頭に出て見料の代わりに飴を売る形からスタートした。³⁾ 教育的な用途で作成されたのは昭和8年の「福音紙芝居」、昭和10年刊行の「幼稚園紙芝居シリーズ」である。紙芝居はその名のとおり「芝居」であり、誰かに演じてもらって見るのが前提となる。演劇的要素が強く、会話が多く、擬音語や擬態語も効果的に用いられる。紙芝居は演じ手(保育者)と観客(子ども)が一体となって感動を共有できるという魅力がある。保育の現場では、日々の保育で物語紙芝居や、参加型紙芝居が多く活用されている。また、災害指導・安全指導に特化した紙芝居がその指導に活用され、食育紙芝居も視覚によって「食育の理解」を促すよい教材となっている。さらには、季節の行事の由来の物語紙芝居によって日本文化、世界文化の継承の伝達にも活用されている。

◎アンケート結果

○実践者 30名中13名 ○自己評価平均点 8.2点

○コメント記述(抜粋)

- ・集中して見ていた。
- ・子どもによって見たい紙芝居が違っていた。
- ・「どうなっちゃうんだろう」と紙芝居に引き込まれている子どもがいた。
- ・「新しいおはなしだ」と喜んでいた。
- ・めぐり方、話し方についてアドバイスをいただいた。
- ・読み終えた後のまとめを褒めていただいた。
- ・季節、年齢に合っていると、紙芝居の選択を褒めていただいた。

③ペープサート

名称の由来は〈paper(ペーパー)+ puppet(パペット)+ theater(シアター)〉の合成といわれている。2枚の画用紙に絵を描き、2枚の紙の中心に棒をはさみ貼り合わせたものがペープサートである。昭和22年頃、永柴孝堂という紙芝居の実演家によって「ペープサート」として発表され、すぐさま保育現場で受け入れられ、児童文化財として普及してきた。その一番の特徴は、表と裏にそれぞれ異なった絵を描くことで多様な変化を楽しむことができることである。登場人物の動きの変化、表情の変化、成長の変化、場面の変化、時間の変化、クイズの出題と答え、見え隠れの変化など楽しみ方は作品によって様々である。身近な素材で作成できるので、子どもが自作し「人形劇ごっこ」などで遊ぶこともできる。

◎アンケート結果

○実践者 30名中3名 ○自己評価平均点 8.0点

○記述コメント

- ・シルエットクイズを行った。子どもたちは積極的に楽しんで、「せーの」で一緒に答えを言うよう助言したが、先に答えてしまう子がいた。
- ・「えー、そうなのか」「知らなかった」との声が聞こえた。
- ・内容がクラスの子どもには難しかったとアドバイスをいただいた。
- ・とてもよく作られていると褒めていただいた。

④パネルシアター

昭和48年に児童文化研究家・古宇田亮順によって創案された文化財である。「Pペーパー」で商品化されているパネルシアター用に特殊加工された不織布と、フランネルという毛羽だった生地できている「パネル台」の摩擦によって磁石のように付着する性質を利用している。形成され、色付けされた「Pペーパー」をパネルに貼ったり、はずしたりしながら、お話や歌遊び、クイズなど様々な展開が可能な文化財である。パネルシアターは「仕掛け」のおもしろさが特徴で、その仕掛け（糸止め・重ね貼り・窓開きなど）により、登場人物の表情が変化したり、手足が動いたり、物が隠れたりすることが子どもにとっては「不思議」「好奇心」を抱くものとなっている。ブラックライトを使用した「ブラックシアター」は幻想的で独特の雰囲気をかもしだすことができる。

◎アンケート結果

○実践者 30名中1名 ○自己評価点 10.0点

○記述コメント

- ・とても楽しそうにしていた。
- ・「良く作ったね」と言っていた。

⑤エプロンシアター

胸当て式のエプロンをシアター（舞台）に見立て、お話の背景を縫い付け、演じ手がポケットから人形を取り出してストーリーや歌を演じる文化財である。昭和54年に中谷真弓氏が考案、発表した。基本的には演じ手は一人でナレーター、登場人物すべてを演じ展開していく。エプロンと人形に面ファスナー（マジックテープ）が付いているので、演じながらエプロンに人形をつけたり外したり、背景の仕掛けを動かしたりしながら楽しむことができる。保育の現場では、物語だけでなく、クイズ、歌、安全指導、食育などを題材としたエプロンシアターが様々な場面で活用されている。特徴は素材が「布」であることである。立体的に人形や背景を表現することができ、紙の文化財では表現できない「奥行」がある。また、「布」は子どもが触っても安全な素材であるので、子ども自らが貼ったり動かしたりして遊ぶことができ、「布の感触」を味わうことができる。

◎アンケート結果

○実践者 30名中0名

⑥自己紹介絵本

これは、令和2年度、令和3年度、当該科目「こどもと言語表現」の授業において、学生が自作し、発表実践をした「児童文化財」である。大きな「半切り画用紙」1枚を使って、切る、折るなどの「しかけ」を駆使した「絵本」を作り、学生の氏名の一字ずつを「かるた」のように絵と文字で表現し、その「しかけ」を利用し、学生の「好きなもの・こと」の絵を4つ紹介、そして最後には「よろしくおねがいします」の文字と学生自身の自画像が現れるという「しかけ絵本」である。学生は、自作の「紙芝居」「ペープサート」「パネルシアター」「スケッチブックシアター」は「こどもと造形表現」の授業において作成済みであることから、当該授業ではシラバスにある「児童文化財作成とその指導」における作成をこの「自己紹介絵本」とした。

作品例：

- (1) わたしの名前は「せみ」の「せ」 → 蟬の絵と○の中に「せ」の文字
- (2) 「きりん」の「き」 → キリンの絵と○の中に「き」の文字
- (3) 「ねこ」の「ね」 → 猫の絵と○の中に「ね」の文字
- (4) 「くり」の「く」 → 栗の絵と○の中に「く」の文字
- (5) 「せきねくみ」です → 裏表紙。「せきねくみ」の文字

ここまでは頁をめくりながら読み上げる。子どもに見える大きさは八つ切り画用紙。

ここから「絵本」を上をめくる。子どもに見える大きさは四つ切り画用紙。「しかけ」により4分割されているので、4種の絵を描くことができる。

- (6) わたしの好きな食べ物は果物です → イチゴ、ぶどう、バナナなどの絵
- (7) わたしの好きな色はピンクです → 桃、花、風船などピンクに塗った物の絵
- (8) わたしの好きな季節は夏です → 海、太陽など夏をイメージする絵
- (9) わたしの好きな遊びはブランコです → ブランコの絵

ここで、全部を開く。子どもに見える大きさは半切り画用紙

- (10) よろしくおねがいします → 文字と自分自身の絵

◎アンケート結果

○実践者 30名中11名 ○自己評価平均点 8.2点

○記述コメント

- ・興味津々で見てくれた。
- ・注目して見てくれて「良い印象」を与えられたと感じた。
- ・名前をしっかりと覚えてくれた。
- ・好きなものには「わたしも好き」「わたしは○○が好き」と反応があった。
- ・「すごいね」「良かったよ」「子どもが喜んでいたら」と褒めていただいた。
- ・子どもたちの反応が良かったと褒めていただいた。

⑦スケッチブックシアター

ここ数年で保育の現場で活用されるようになった。スケッチブックをめくりながら、話しや歌を進めていくもので、絵を描くだけでなく、そこに「しかけ」を施すことにより「楽しむことができる」工夫が大事である。スケッチブックと画材さえあれば簡単に作成でき、また、持ち運びも便利であるので、活動の「導入」に活用されたり、「歌唱指導」「クイズ」などに活用されたり、保育の現場において重宝され、今後より発展が期待できる文化財である。

◎アンケート結果

○実践者 30名中5名 ○自己評価平均点 8.2点

○記述コメント

- ・○×クイズでしっかりと集中していた。
- ・これを見ることで楽しく手遊びができた。
- ・喜んでいて。
- ・ほとんどのこどもが見ていたが、後半、後方の子どもはあきってしまった。
- ・子どもが知っている「アンパンマン」を題材にしたので声をだして反応していた。
- ・「すき間時間」にいいね、と言われた。
- ・子どもが興味を示していた。BGMを使用してはどうか、歌につなげるならピアノを弾いたほうが良いとアドバイスをいただいた。
- ・最後に「素敵なのをありがとう」と言っていた。

2、児童文化財の役割について

- ・実習生と子どものコミュニケーションをとることのできるもの。子どもとの距離が縮まった。(多数)
- ・子どもと一緒に楽しめるもの。
- ・保育時間の「すき間」を埋めるのに良い。(多数)
- ・活動の導入に使用する。主活動につなげる役割。
- ・視覚があるので子どもが集中する。
- ・子どもたちとの会話のきっかけになった。
- ・子どもの成長にとって必要なもの。

3、今後の活用と留意点

- ・児童文化財を積極的に取り入れ、子どもの「ワクワク感」を引き出したい。
- ・子どもたちの前で話をする時や「すき間時間」に利用し、声の大きさに留意したい。
- ・子どもと一緒に楽しめる「ネタ」としていくつか用意し、対象年齢や行うタイミングに留意したい。
- ・「ねらい」をもって使用し、子どもに伝えていきたい。
- ・行事やひとつの活動として取り入れたい。
- ・活動の導入として子どものイメージを膨らませたりしたい。見える大きさ、配置に留意したい。

丈夫に作りたい。

- ・製作の導入や帰りの会の前などの「空き時間」に利用したり、ルールや行事などの文化を伝えたりする際に使いたい。子どもが楽しむためのものであることを忘れず、流れ作業にならないように一つ一つ心を込めて利用したい。
- ・児童文化財を使って季節の行事を紹介したい。
- ・イベントや季節を感じるために活用したい。絵本だけでなく他のものも活用したい。
- ・子どもの人数や環境設定に留意する。
- ・それぞれの使い方を理解して使用することが必要である。
- ・視覚で伝えることを大切にしていきたい。

考 察

幼稚園実習の児童文化財の実践において、学生の自己評価平均点はどの文化財も10点満点中8点台であった。

最も実践人数が多かった絵本はほとんどの学生が数回か実践していた。その理由として考えられることは、「幼稚園の現場にたくさん存在しているので準備の必要がない」「幼稚園の先生も毎日読んでいるのでモデルがある」「学生自身にとっても最も身近な文化財であり、見慣れている」「練習は不要と思っている」などである。

紙芝居においても絵本と同様に実践者が多いが、「芝居をすることに躊躇する」「見せ方に不安がある」「幼稚園であまり取り扱っていない」などの理由で実践しなかった学生がいると考えられる。

ペープサート、パネルシアター、スケッチブックシアターに関しては、「自作の作品に自信がない」「練習が必要である」という理由で実践者が少なかったと考えられる。

エプロンシアターは、学生が作成していないので実践者は0名である。

自己紹介絵本は「普通に自己紹介をするより印象に残る」「自身の作品に自信がある」という理由で実践した学生がいたのではと考える。

児童文化財は、学生にとって子どもとの関係を構築する上で良い役割を果たしたことが分かった。児童文化財の役割を「すき間時間を埋めるもの」と捉えている学生、そして、幼稚園教諭が多々いることが明らかになった。学生が今後も児童文化財を活用したいという思いがあることも明らかになった。

まとめと今後の課題

今回の検証において、養成校の教員としての大きな痛手は児童文化財はすき間時間を埋めるものと捉えている学生、幼稚園教諭が存在することである。授業内外で「すべての活動にねらいがあり、児童文化財を見聞きすることによって、子どもの心情・意欲・態度が育つ」と話し、手遊びや児童

文化財は、「どんなに短時間であってもすべてひとつの『活動』であり、子どもの注目を集めるためや、すき間時間を埋めるものではない」という理解を促す取り組みを行ってきたが、違う捉え方が浸透しているようである。この現状を真摯に受け止めこれからの課題としたい。この科目の授業での具体的な取り組みとして、「指導案作成」にも重点を置き、それぞれの文化財における「ねらい」をしっかりと立てることができるよう授業を進めていきたい。また、「幼稚園教育要領の理解」「教育課程の理解」という「保育の基礎」の復習も必須である。

この科目において「児童文化財の楽しさ」を学生自身が体感するような演習を多く取り入れた。実習において実践する学生が多くいたこと、そして、その自己評価の点数が高かったことは、この科目の学習成果と捉え、今後も「児童文化財」の研究に尽力したいと考えている。そして、学生が保育者となった時に多様な児童文化財を保育に取り入れ、子どもたちに楽しい時間・場面を提供できる保育者としての活躍を期待したい。

引用文献

- 1) 文部科学省教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会. (2017). 教育課程コアカリキュラム (p.29). 文部科学省
- 2) 谷田貝公昭. (2019). 改訂新版保育用語辞典 (p.196). 一藝社
- 3) 松本峰雄. (2014). 保育における子ども文化 (p.68). わかば社

参考文献

- 松本峰雄. (2014). 保育における子ども文化. わかば社
齋藤政子. (2023). 保育内容「言葉」と指導法. 中央法規
小川清美. (2010). 児童文化. 萌文書林